

圓光大師傳

卅九之四十



法然上人行狀畫圖第三十九

上人臨終まへれご遺言ゆいごんのしひあり。孝養まこと乃この  
りに精舎しやう建たたれいとたとをたはゆいしれいま  
心ころあらむのく群集ぐんしゆせゆ念佛にぶつして  
恩おんを報むとへし。さらに群集ぐんしゆあれ。闘たう諍じやうれ因縁えん  
たりやの給へた。志すれこも法蓮ほつれん房ぶどう世間よ乃  
風儀ふうぎよ順して。念佛にぶつのほろの七日ななくもん  
佛事ぶつじ成じやう終しゆとへまりし。申されたまさし。諸人しよじん



これよきつぎ

初七日 導師信蓮房

檀那大宮入道内大臣 實宗 此諷誦の文云

夫以先師在生此し。弟子朝をのりて

ゆふ。一心の精誠をこころして。十重禁戒を

うく。かゆへり。濟度を彼岸よたなりん

敬て諷誦をこし。徹よ終と。小善根をきこふ

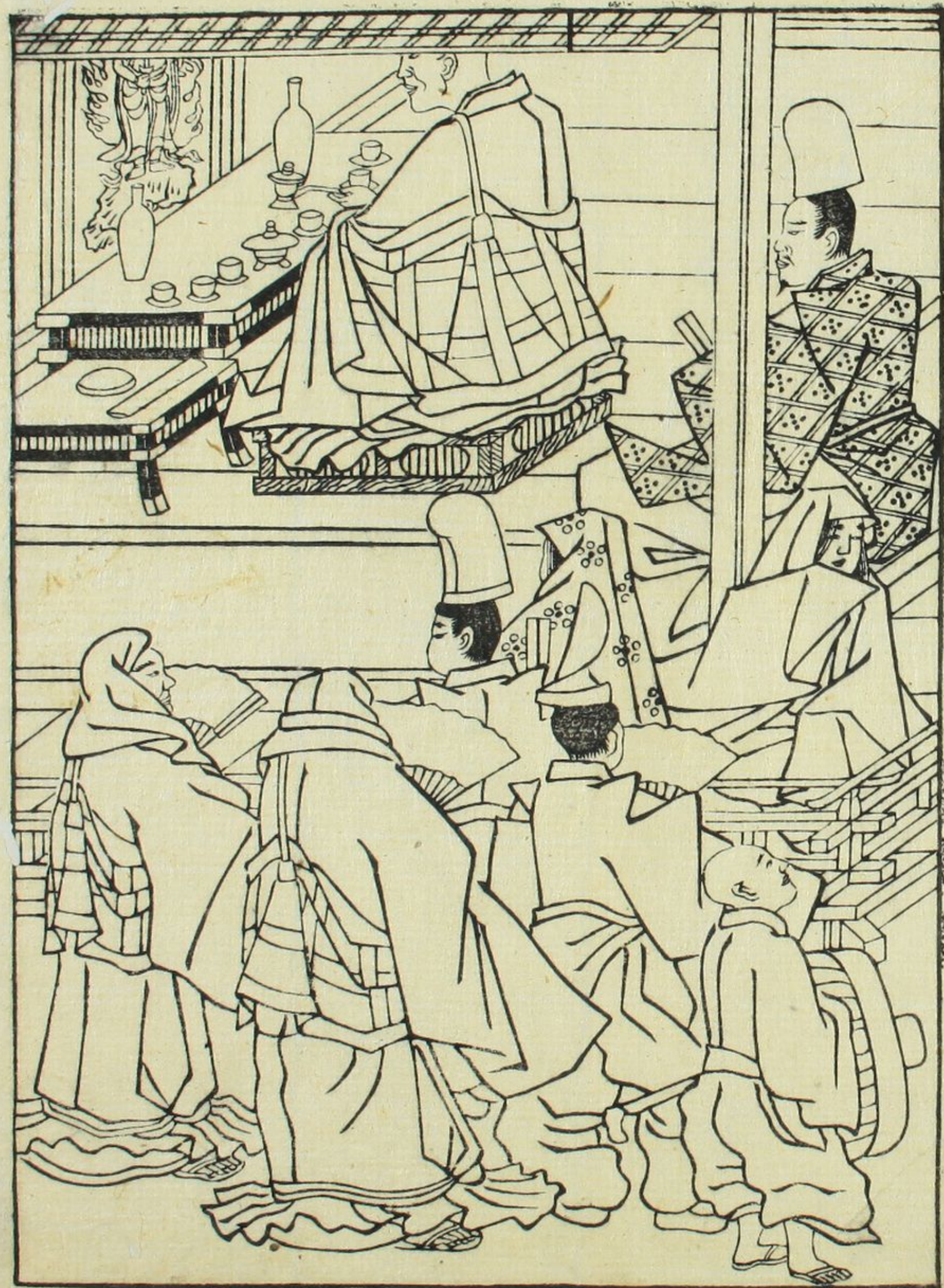
事なり。これらゆ大因縁たらん。仍蓮臺の

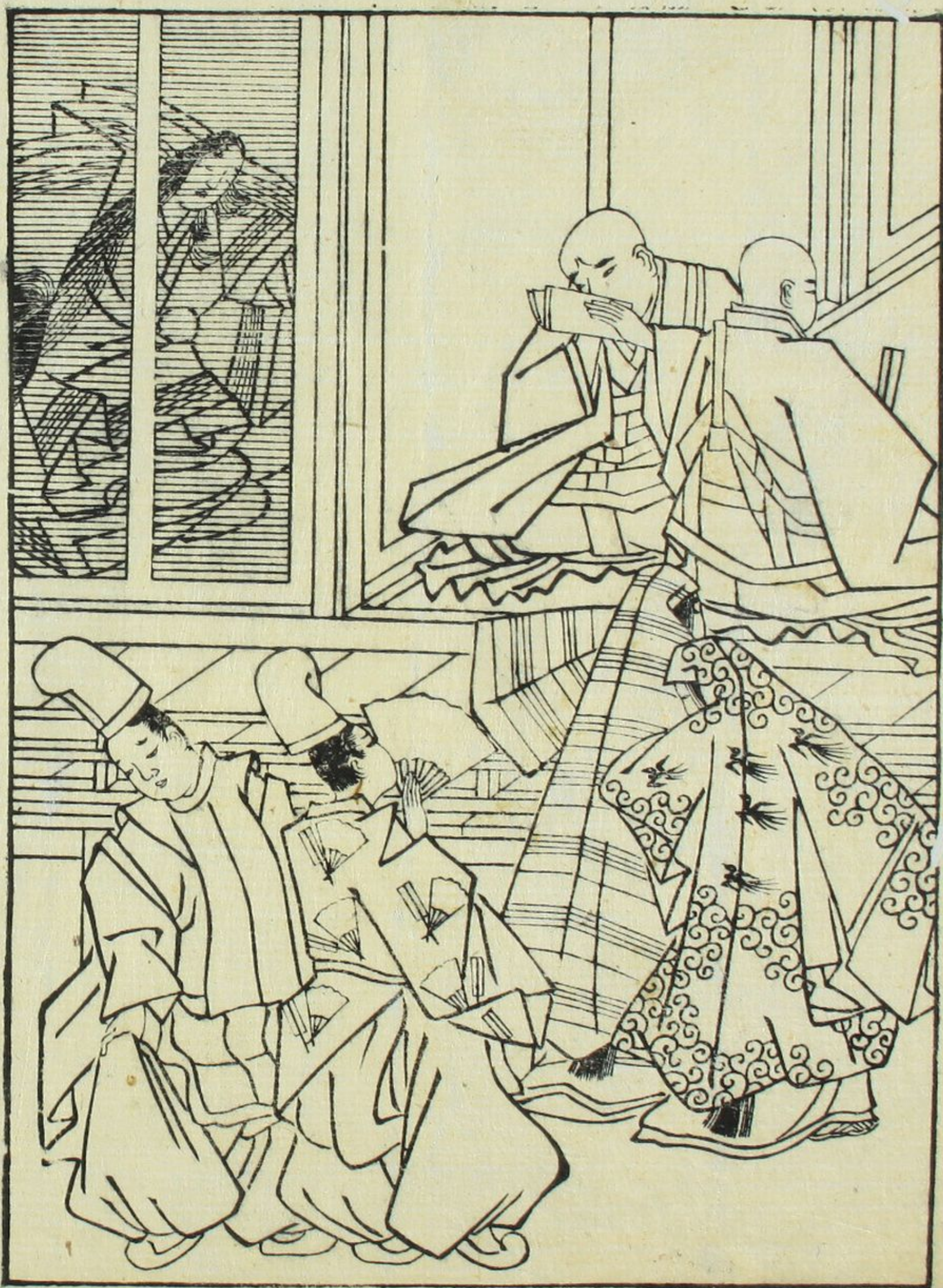
妙果。此らゆらんが。せめて。ややく霜鐘乃逸

韻をたけ 真名をこころしく假名よ  
うめとい下これよれぬ







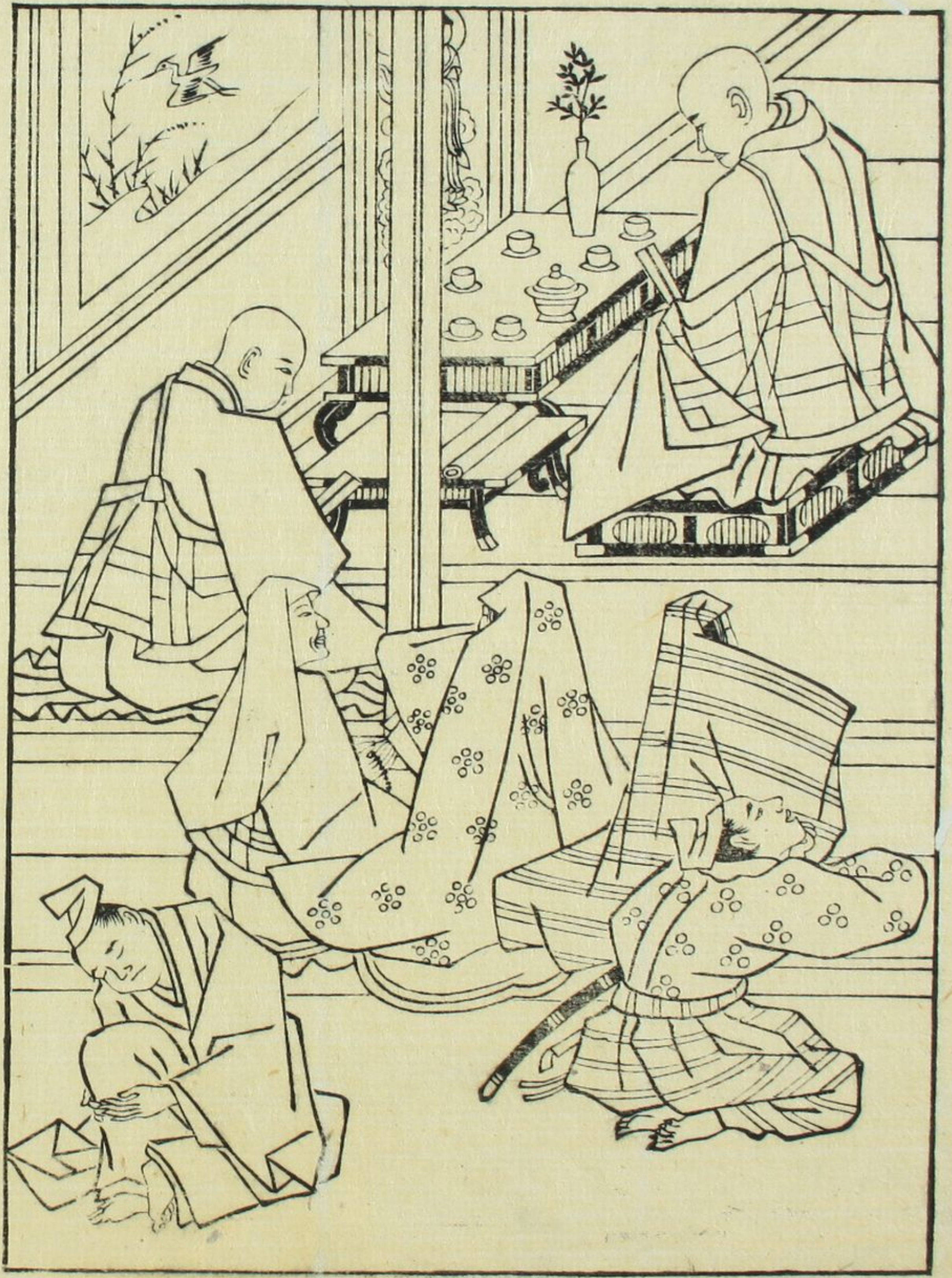


二七日 導師求佛房  
檀那別當入道孫 某甲



Small vertical text or signature mark in the bottom right corner of the right page.





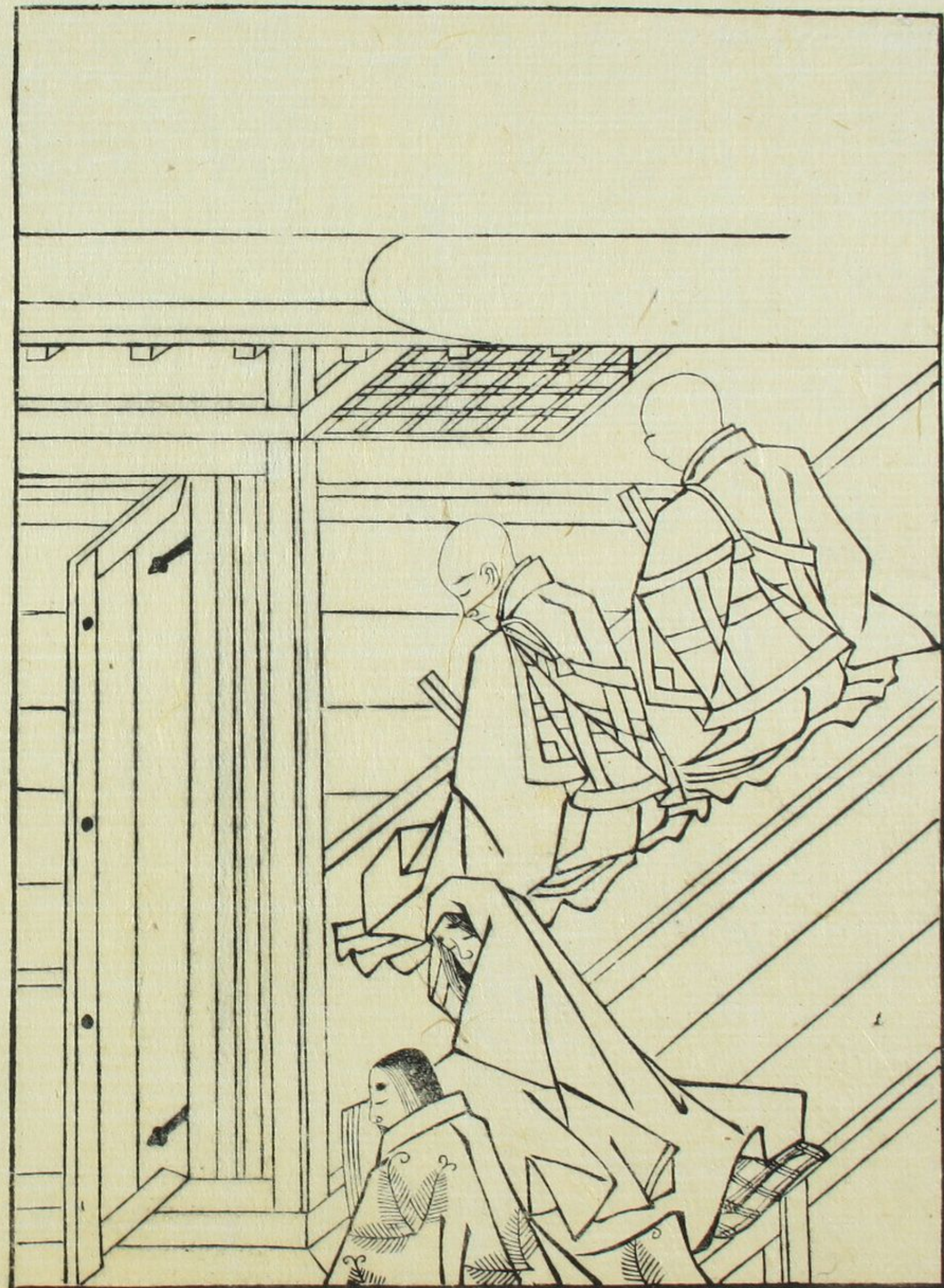
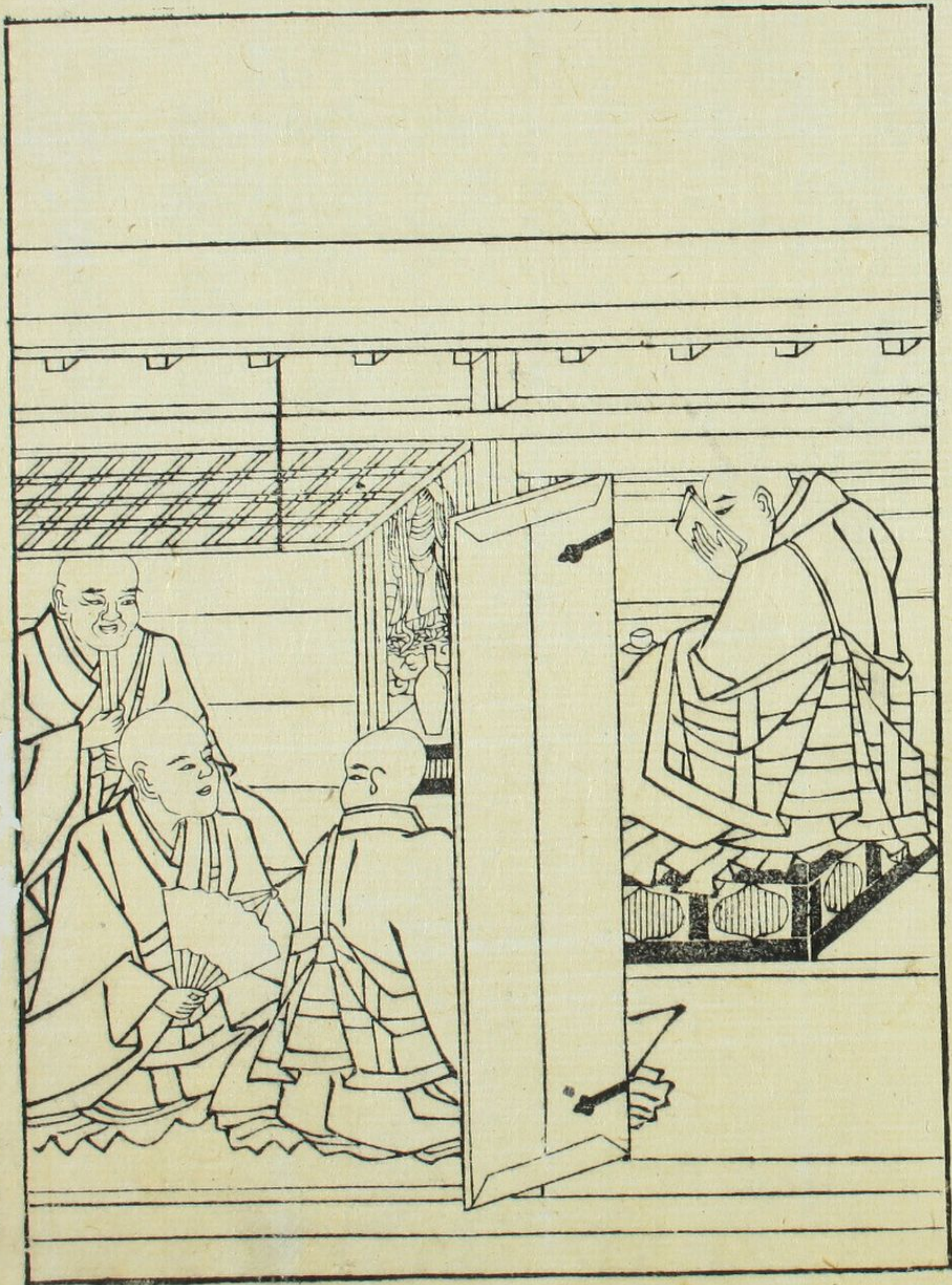
三十七日 導師住真房

檀那正信房湛室

誦經物唐朝王義之摺本一紙面十二行八十餘  
字書之

西へよりゆへ道の上へ  
昔を多に跡にあらま



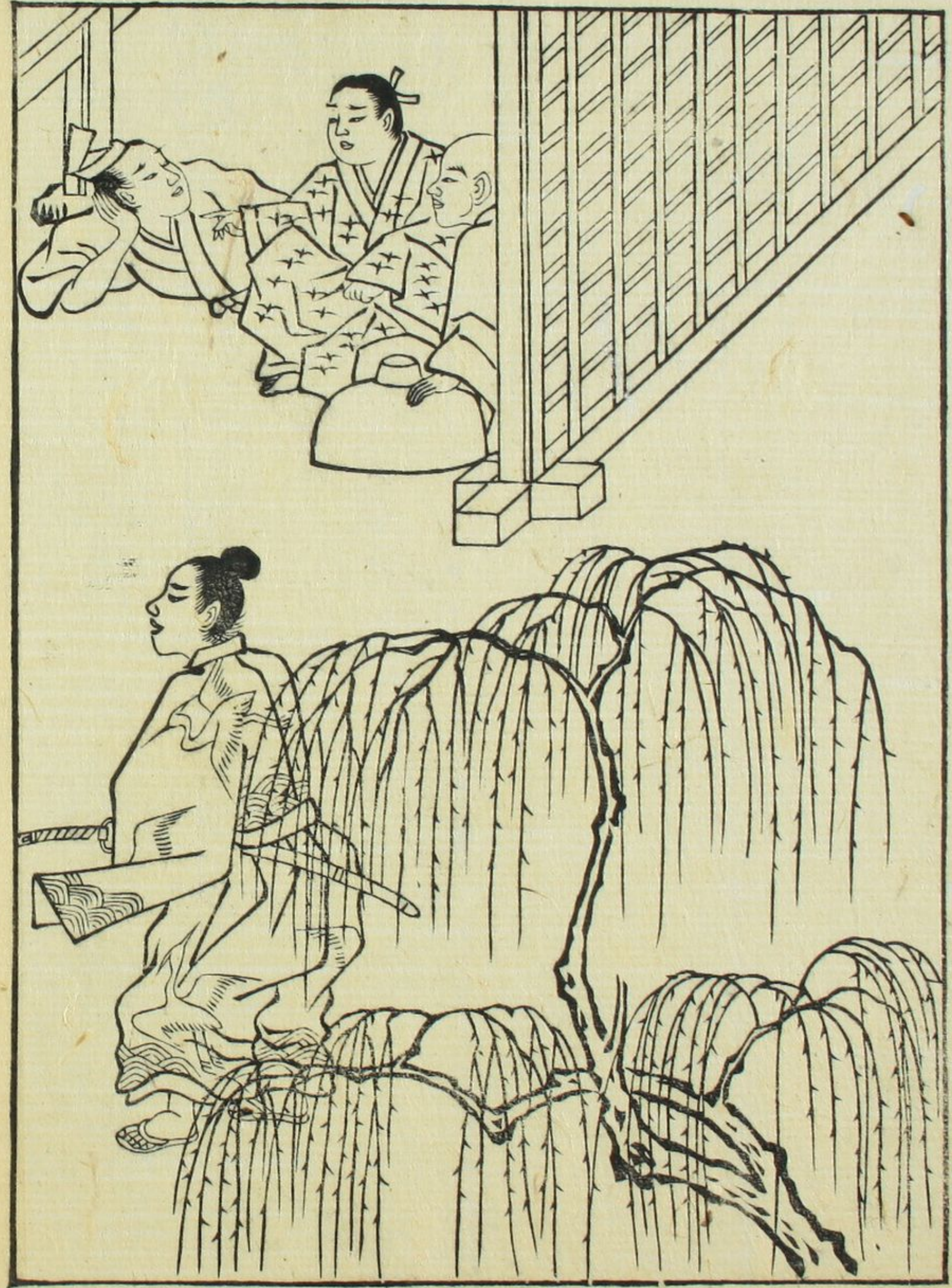


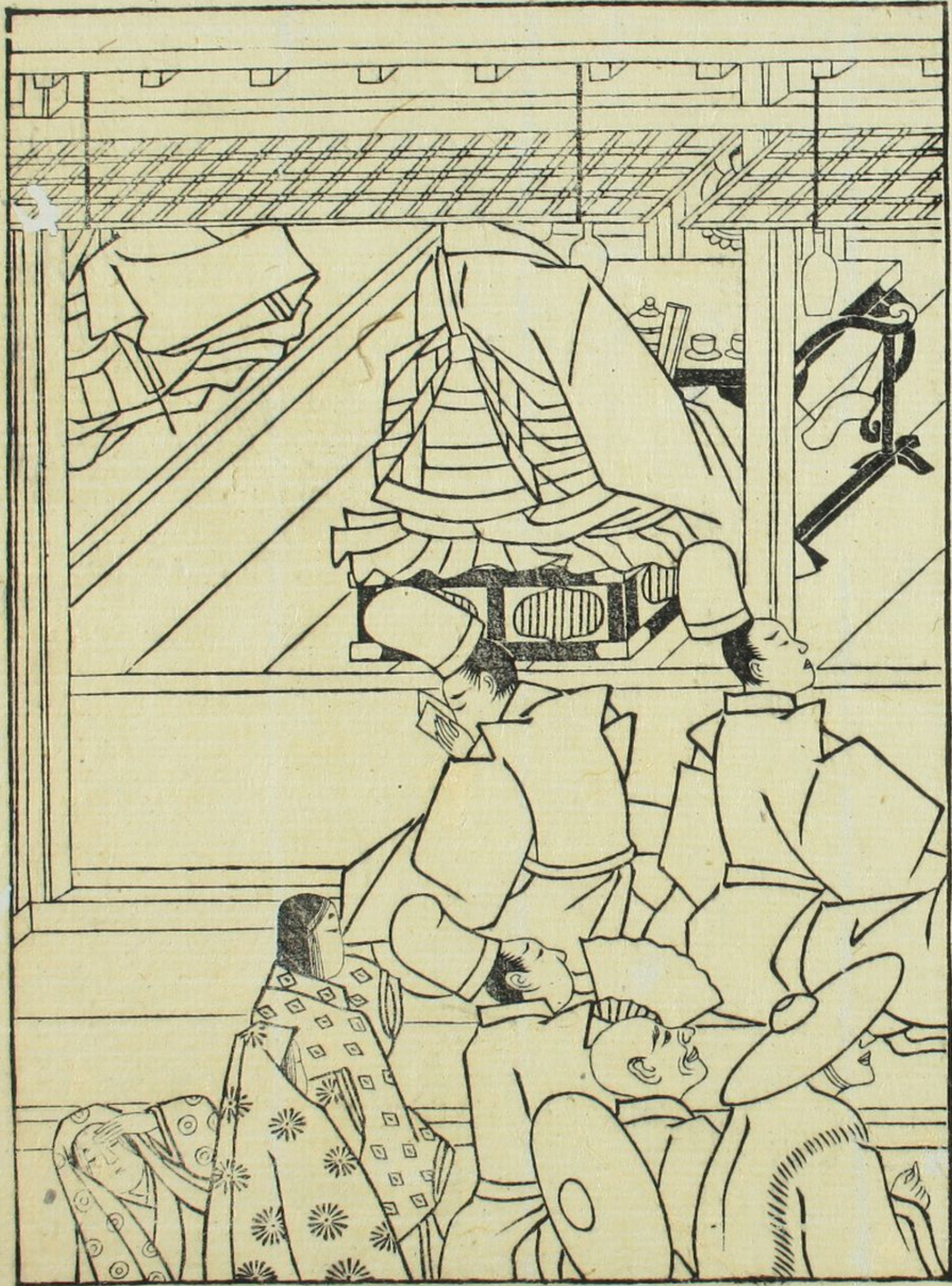
四七日 導師法蓮房

檀那良清の此諷誦文云

先師末法萬年のくぐりめよありて。赫陀一教  
のよぐまゝするをばいふ。智恵鈕をいひ  
らぐ。莫耶のほこらきこらにあり。戒行  
玉をさく。摩尼のいふ。明をたす。抑  
尊靈逝川よらきだらして四七日。遠人來迎の  
雲をのこむ。新墳よはるく。两三度遺弟

酷烈の氣をく誠諦の言をたもいて。菩提の  
願をこふといへとも。掲焉其肯意敬てそく  
伏膺と





五七日 導師えんし權律師けんりつし隆寬りゆうくわん

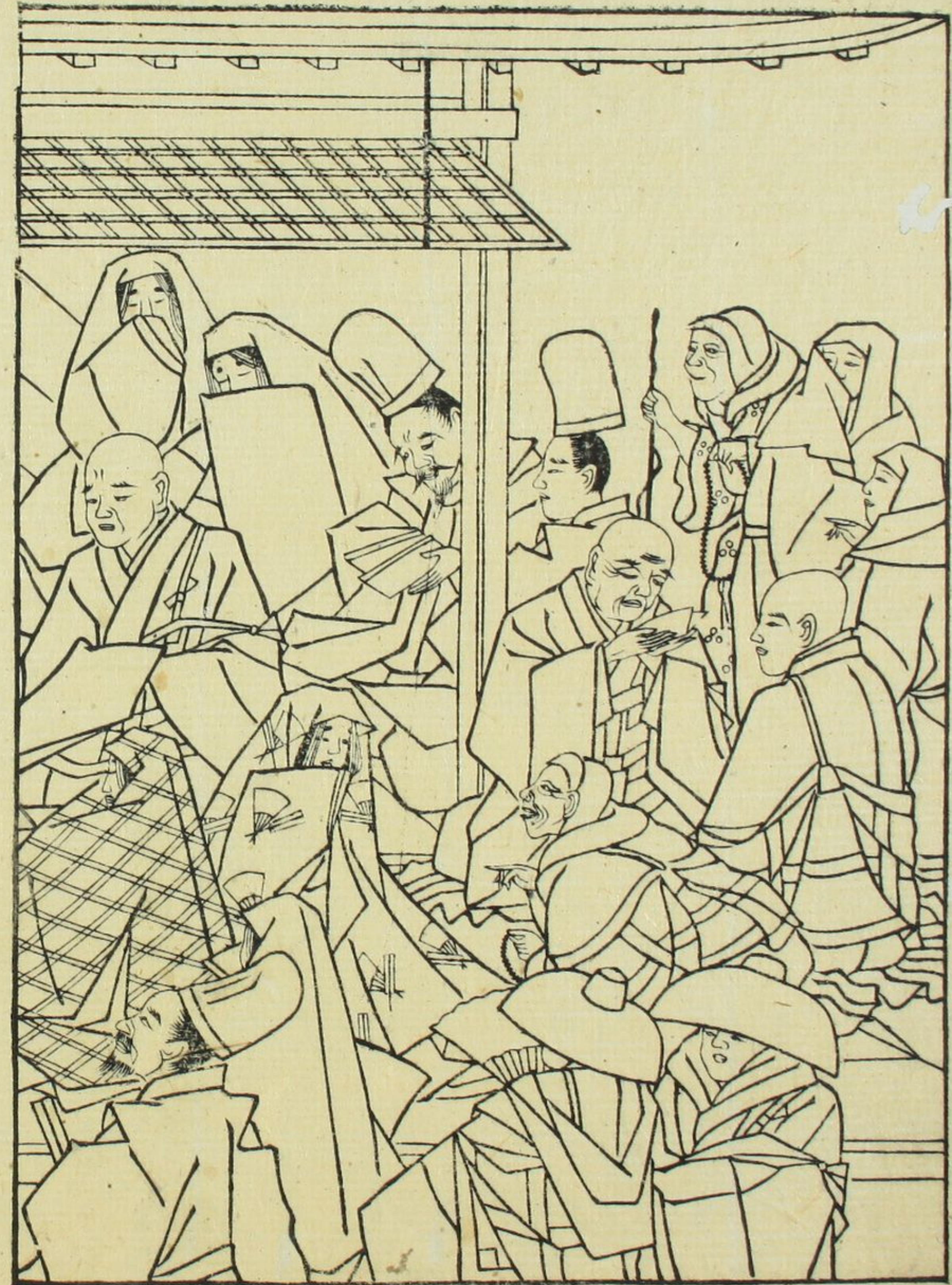
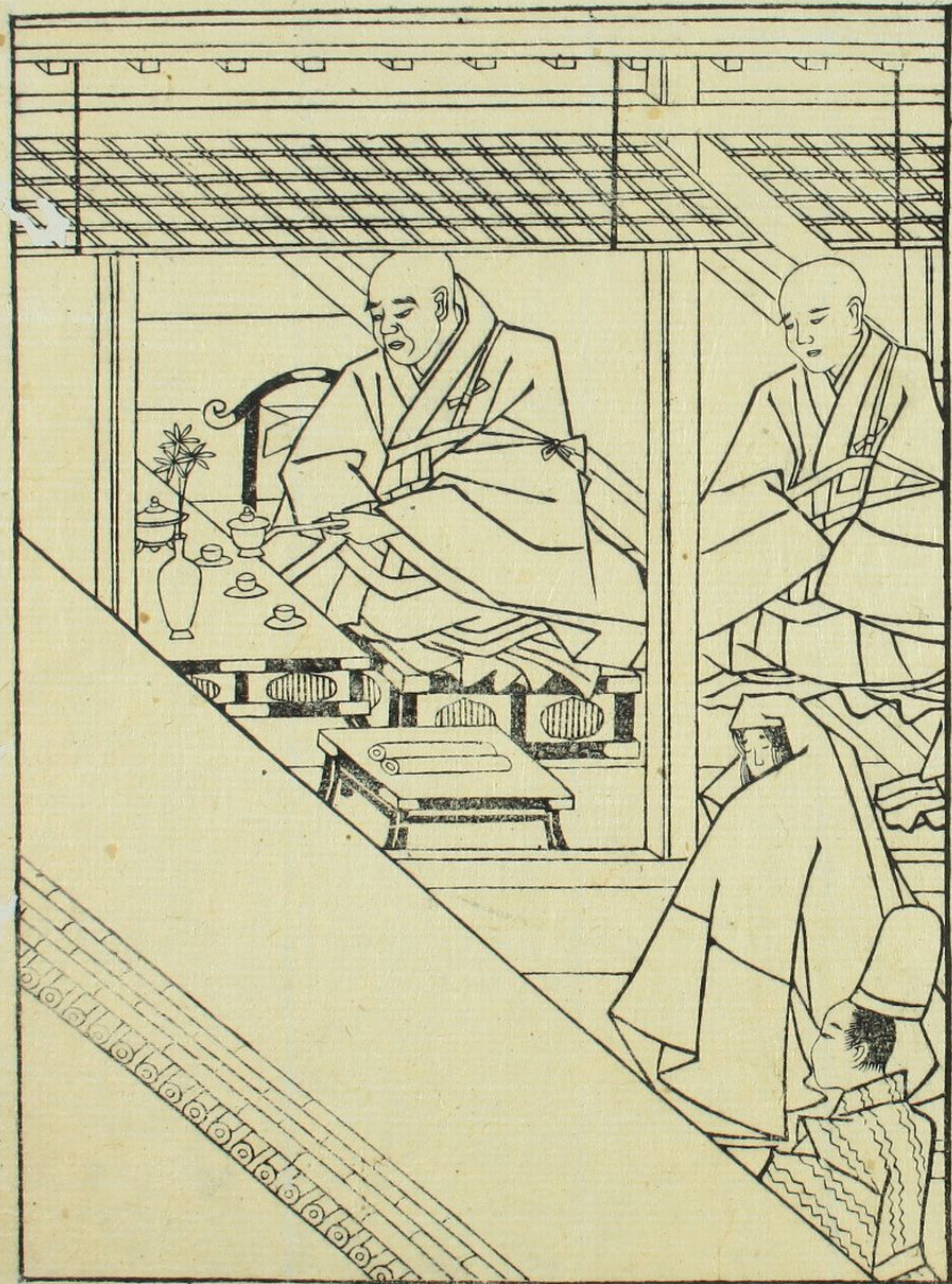
檀那だんな勢觀せいくわん房源ぼうげん智ちり此諷誦の文云

彩雲軒さいうんけんをたほぬらしく見とをくきて来集治  
異香室いこうしつよりこい我さく人ききて嗟嘆さたんと



五七日

五七日





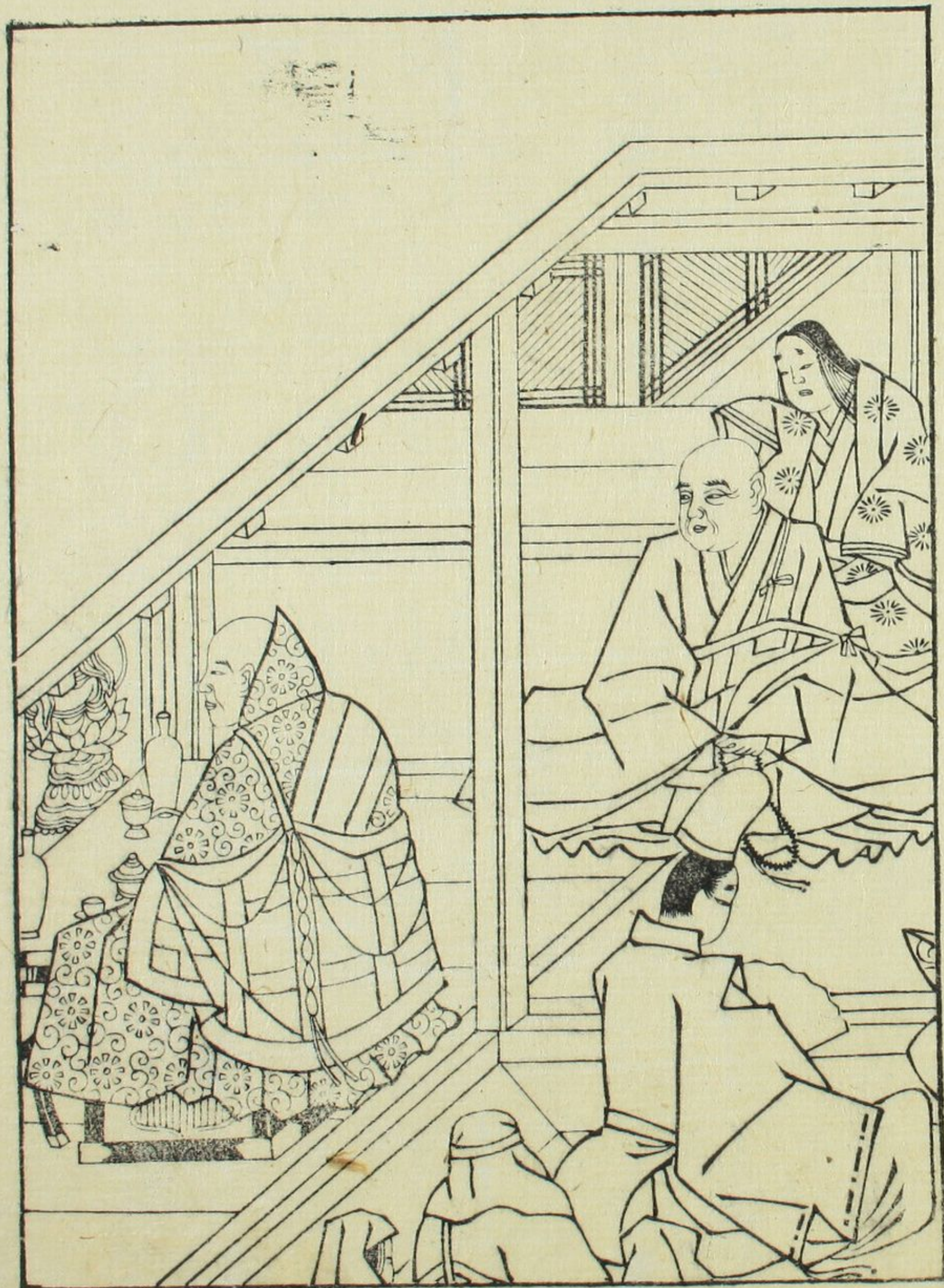
六七日 導師法印聖覺

檀那慈鎮和尚に諷誦の文云

佛子上人存日れあひびぶ。まどしく法文を談し。  
常に唱導よまらぬ。結縁れなほひあはる。清。  
濟度の願うたがまらぬ。これよまらぬ。今六七の  
忌辰よあらりて。いさうう三敬乃諷誦を修次。  
法衣をけくぐく往生れ家よをくる。解脫乃  
衣よこれ。法食成まうけて。化城れ門り

ほどこと。禪悦の食に就たり。然則聖靈ハこれ  
平生れ願よこころへて。これら清上品乃蓮臺よ  
まら。佛子ハこの眞實れ思よまらりて。もるを  
家初乃引接をまらん





七、日 導師三井僧正公胤

檀那法蓮房信宣の此諷誦の文云

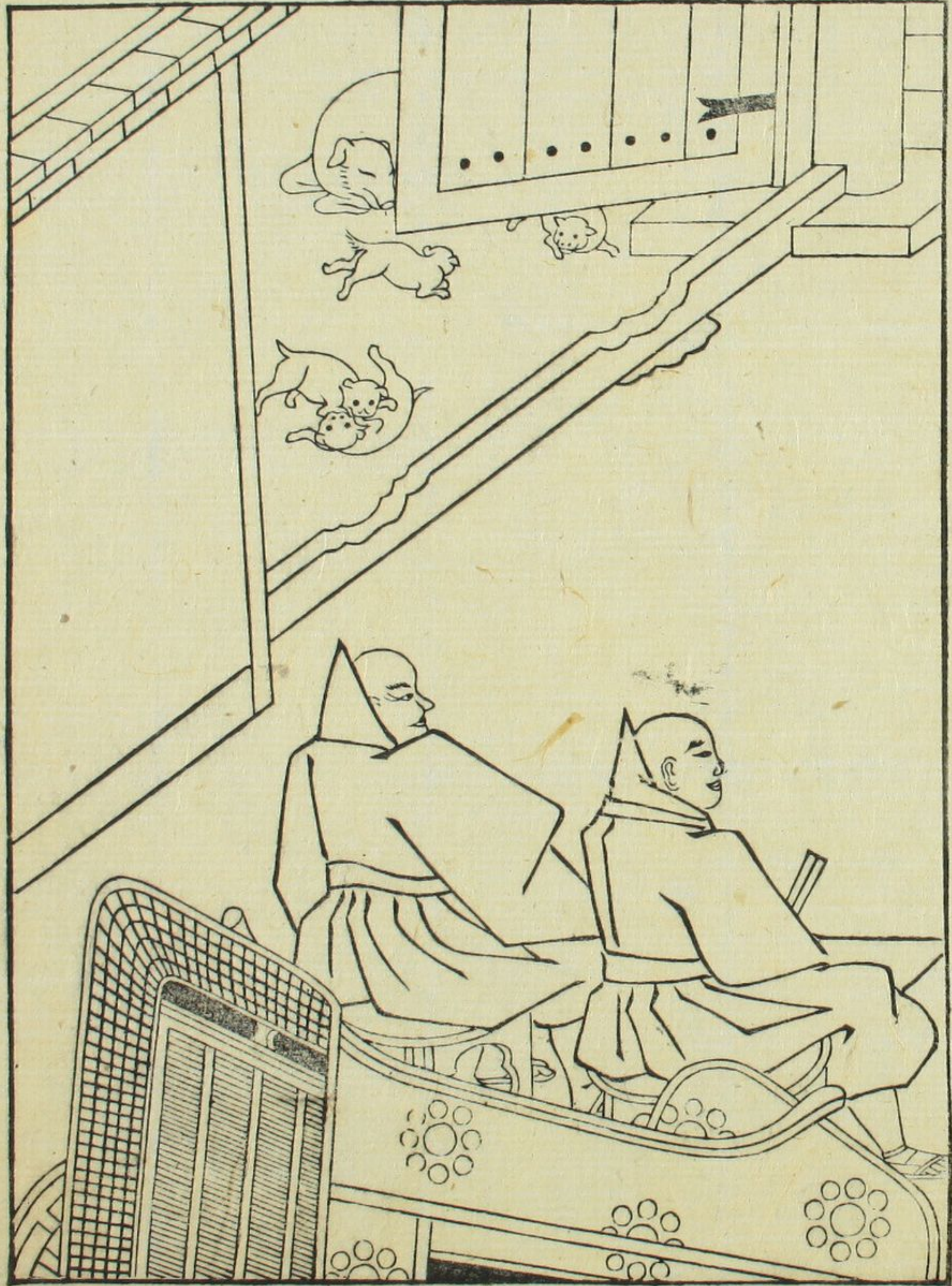
先師廿五歳のじし弟子十二歳れときか  
しけなくも師資れ契約をむしむごう  
五十九年序をいめり。一旦生死をぬごり  
九廻の賜たえなんとい。北嶺黒谷れ草庵よ  
宿せしより。東都白河の禅房よりは里  
しにいたるまて。其間撫育れ恩といし提擲の

志といし報謝の思昊天まいまわれ。ご後  
まて弥陀迎接一軀れ形像をあつら。胎  
藏金剛两部の種子を安と。又妙法花経八軸  
を摺寫し。金光明経一部を書寫して。そて  
開眼し。そて開題と。一心の懇志三寶知見し  
給へ

三井れ僧正公胤の導師をのぞき申され  
けしあひむにまひのほつたご心地しを

ほどに導師として種々の捧物を隨身せし此  
たのちを子細おぼつれりききに説法の  
こころ佛經の讚歎をりしてのらばふきに浄土  
変疑抄をやく因縁のへていく今日此唱  
導よとくこ業する事いひさへよ上人誹謗此  
重罪を懺悔せんためゆり上人面談はれい  
てよ條の乃僻事汝たをされ又我宗れ大事  
三箇條上人のをへをもちて此を改と

門弟と稱するにたまらんと人一言れ智辨を  
きつて下愚三卷の謬書をやくといへるを  
先非をのめし波をらへて後悔をいふ  
たのひまをえがて。此よらて随分乃時  
嚟をらげて廟堂よ詣し。慇懃懺悔を  
うして寶前よひごまげく弟子はこけ  
いりて亡魂こけをたごえ給へらく  
落渡せられたまひ。聽衆感歎のよ。ひきを



たう。諸人随喜れたう。袖を志るるらるる







法然上人行狀書畫圖第四十

上人がらしての終りくつまいりやうえん一向專念いっしやうせんねんの義をた  
はきに人おほく謗うらなしていよくたとい諸行しよぎやう成なり修しゆ  
とといぬも。あつて念佛往生にぶつじやうせいじやうはららとれる  
處ところううゆゆたたんんぞぞああれれぐぐららにに一一向向專專念念のの義義をを  
たたけけるるややここれれ偏へん執しやくのの義義たたりりととかかくくれれごごうう  
難がたををいいふふははここれれ宗しゆ乃のいいふふををここららししるるゆゆへ  
たたりり。經きやうよよはは一一向向專專念念無む量りやう壽じゆ佛ぶつとといいひひ釋しやくにに

一向專稱弥陀佛名と判り。經釋をくらひきて  
了らる。此義をたてて。誠よせむ所の地  
か。此難をいふ人とたえり。先釋尊成  
謗。次り善導を謗とへ。それとほく  
け身れへよあはれとそおほてこれなる。  
一向專修の義を破る人たほり。中に。  
園城寺に長吏大貳僧正公胤。いまも大僧都  
たり。上人を誹謗して公胤がんてん

文を法然房にえぬ。あはれを法然房乃  
見たる。人事の公胤がえぬ。もあはれと  
自歎して。浄土変疑抄三卷を記して。選擇  
集を破と。則ち佛房を使者として。上人の  
室よをらる。と記。上人に使よひて。こ  
きをひききん。上卷のく。めに法華に  
即往安樂。文あり。觀經。讀誦大乘。文あり  
讀誦の行。極樂よ往生す。に。たよはれは。げ

あゝんまづるに讀誦大乘其業を廢して。た  
念佛ごうりを付屬といふ。これおほきなる  
あやまりの理といふ。これ文を又たまたいで。  
をわらばんは。ごうりをまての終る。此僧都  
これやどの人といはれをいばわ川無下此事わ  
らわ。一宗をたけいごま。これ廢立のじひは  
存じらんとなをいふ。まづるに法華を  
まて。觀經往生れ行よいきらる事。宗義の

廢立は。すくに似たり。まづるに學生れ  
たれん。觀經は。これ余前の教なり。これ申り  
法華を攝とて。後こそ難でる。今淨  
土宗其心。觀經前後の諸大乘經をとりて。  
これとて。往生れ行乃中に攝と。なんぞ  
法華ひらりまらんや。あやまりく攝とる心。  
念佛よ對して。これを廢せんためたり。を  
の終る。これ使歸て。これより。返るる。

僧都口紙とらひて言説たらしむる事あること  
眞妹門の女院中宮よて一品乃宮後御懷  
妊此時上人の御戒の師よめはまご公胤ハ御  
導師よ集つたまひて集會一終事侍ま  
御受戒とてと人退出せんとし終り預  
まごわて志んし供いせ終へ見集よ入侍  
終んご大貳の僧都御房申せし供と申  
あひし暫祠候一終よ御經供養とてと

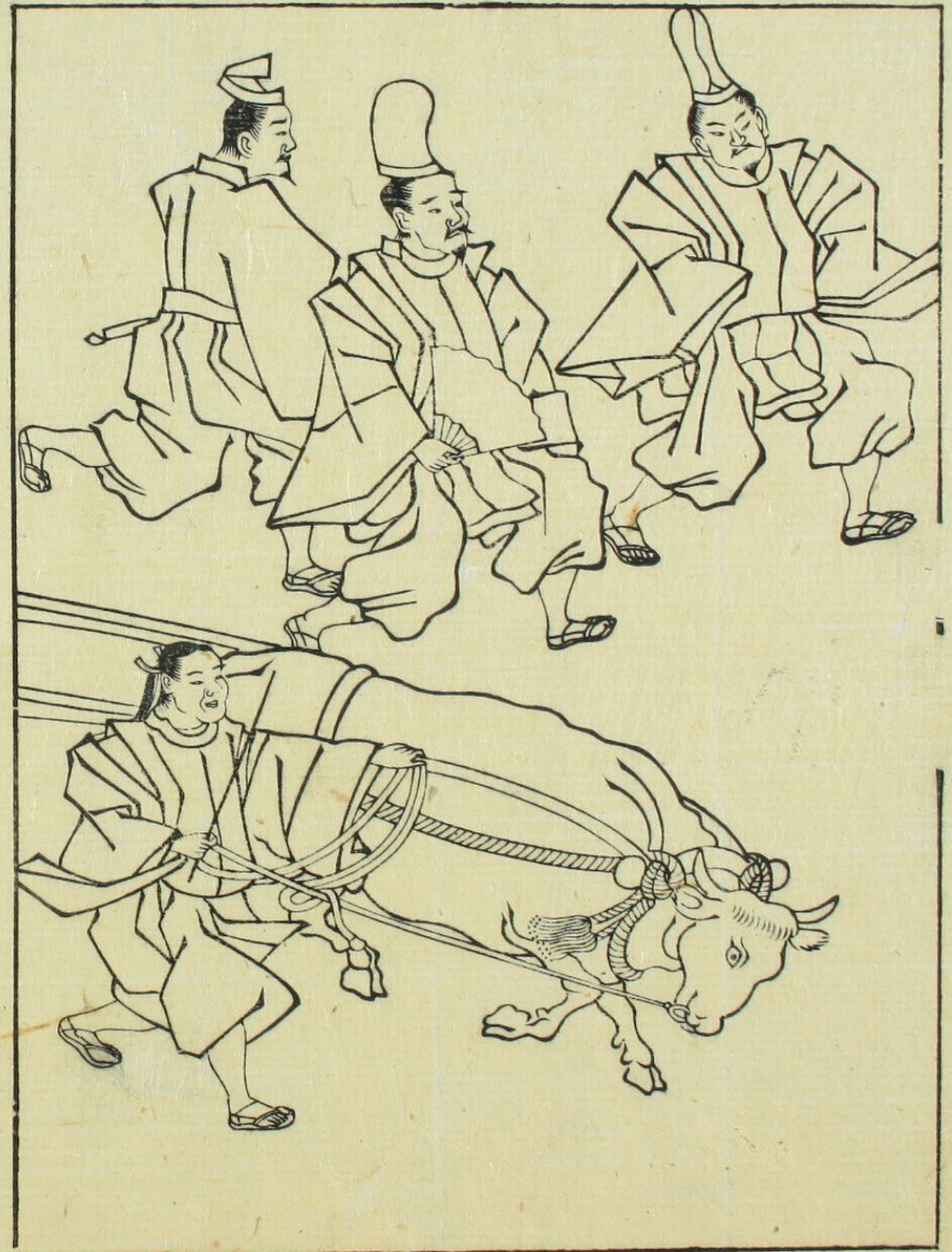
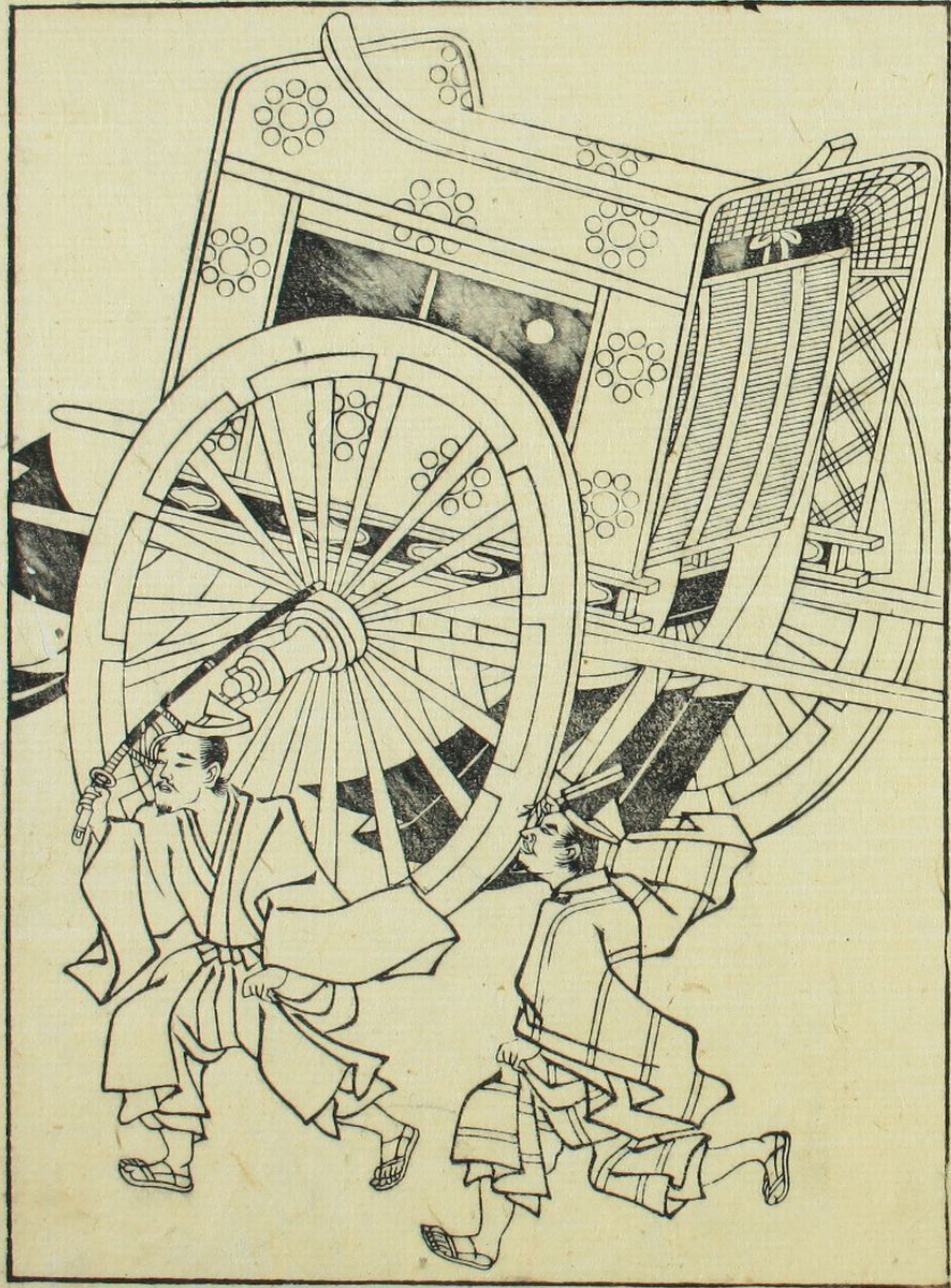
僧都さつりて上人よ念佛此事をぞ尋申  
遍々終とてまば大要たるとはまて申侍  
しり東大寺の戒乃四戒律よと侍事ハ  
如何なるいふれよ侍と申しとあり  
東大寺此戒の四戒律よてあるべき道理を  
具よ釋したまひせりしと僧都のりて  
勤てん終ひたると上人申しとあり  
しとたがひとらむとて次の日又集會此時

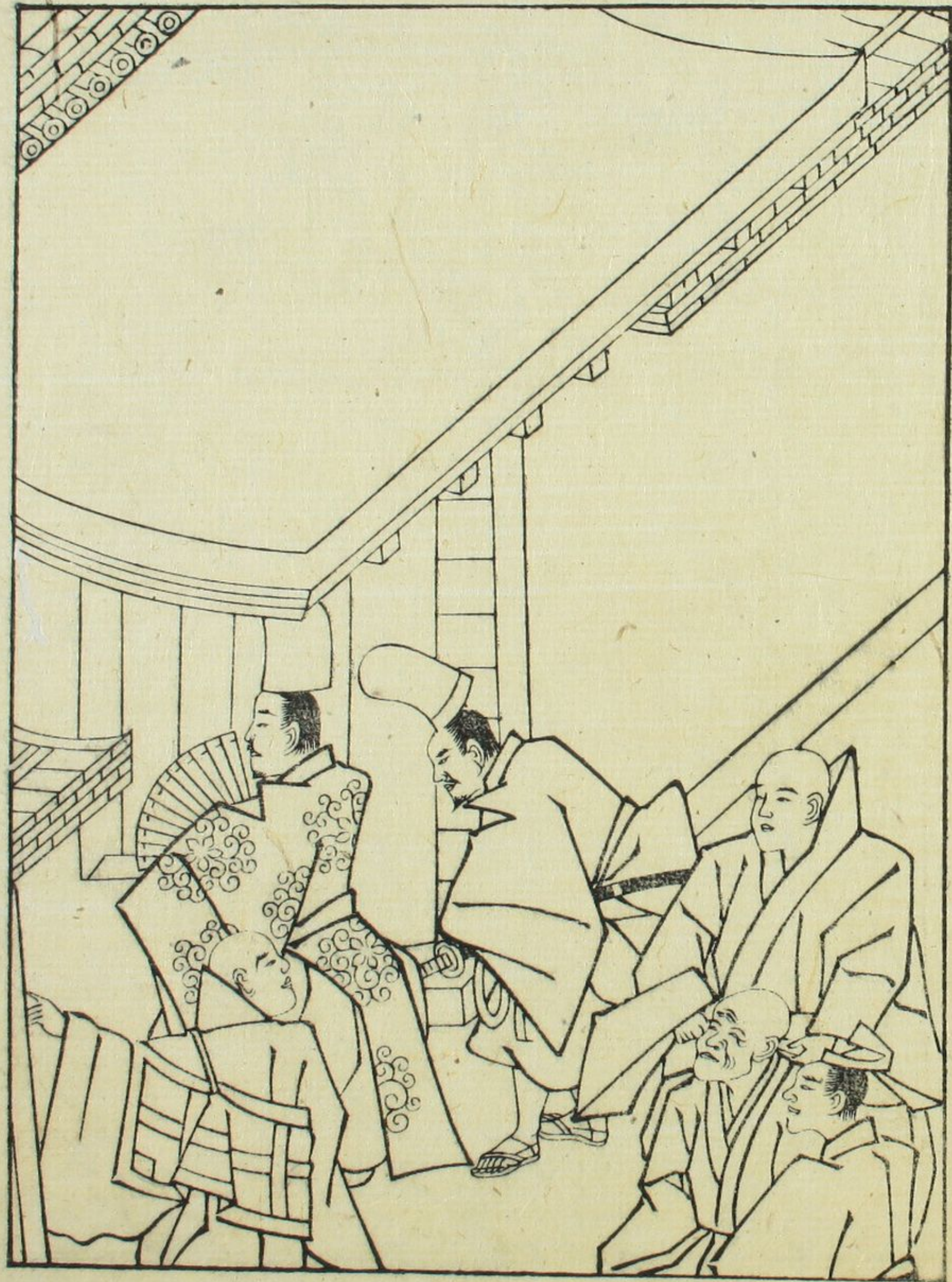
昨日仰られ侍し事こそ誠には流々  
こて僧都以外よ上人を歸敬したまひ。浄  
土の法門を談じかひて餘事有りけり。家  
玄暉をくゑんと。僧都申はまじりて  
それ宗の人乃申侍し。くゑんとこそ  
申侍し。暉とかまきてこそ。くゑんと  
侍し。暉とくまきて。くゑんと侍しと  
上人直申はれま。惣じてかくれ。たのめや

ありこそ。七箇條もて直はれたり。うは  
僧都退出のら。弟子にかつて。きつる。今日  
法然房。對面して。七箇條は。僻事。返直  
は。また。常に。見系せ。申。字。は。け。侍。あ。ん。  
たつ。と。ころ。の。浄土。法門。聖意。違。と  
處。り。は。あ。ま。り。信。じ。へ。り。上。人。の。義。を  
そ。い。は。れ。お。ほ。ま。れ。る。な。ら。り。と。て。即  
製作。變。疑。抄。三。卷。を。や。り。し。ら。誠。り

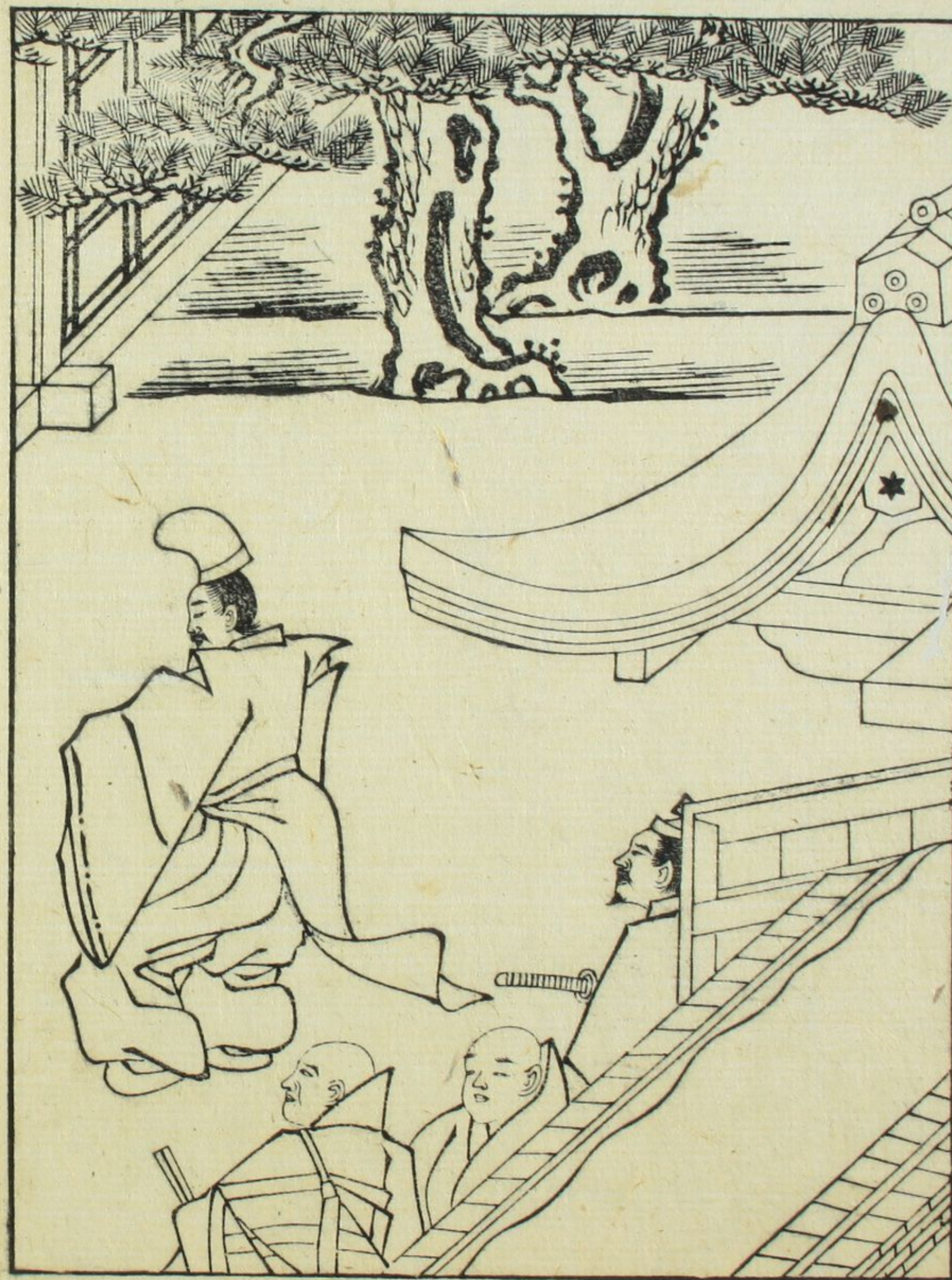
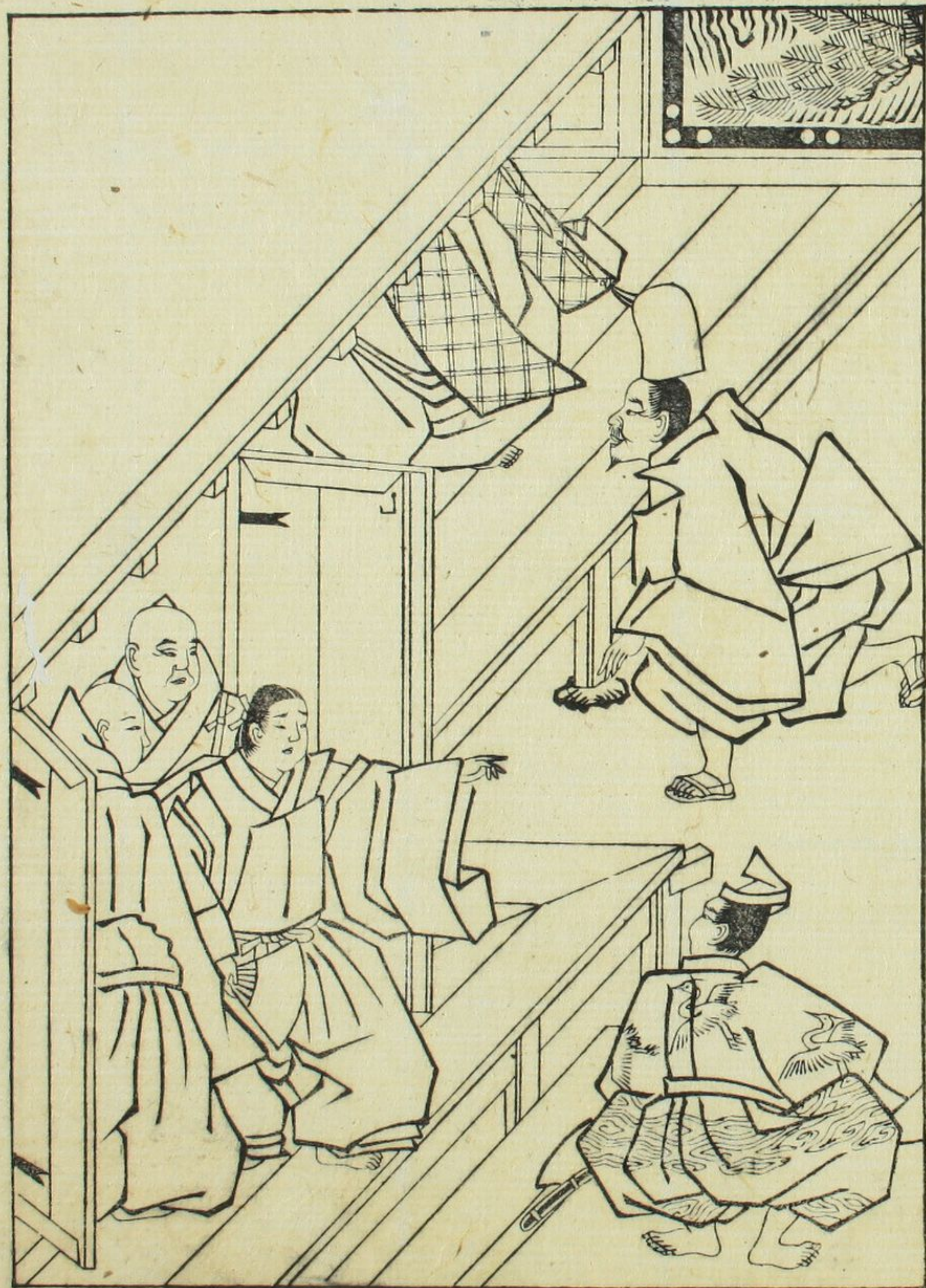
博覧のいりゆりらるるをばめ申  
さきなる僧正ハ顯密の達者よて智行  
兼備なり。稱養の詞信をさるにさる  
えたりし上人ハ中陰の唱導をのぞこけと  
りて。うまひて前非を懺悔せぬれまひま  
と人の勸化よ歸し念佛れ行をこりたり  
して。建保四年閏六月廿日。春殊七十二。  
禅林寺にけりにして。往生をさるれに。

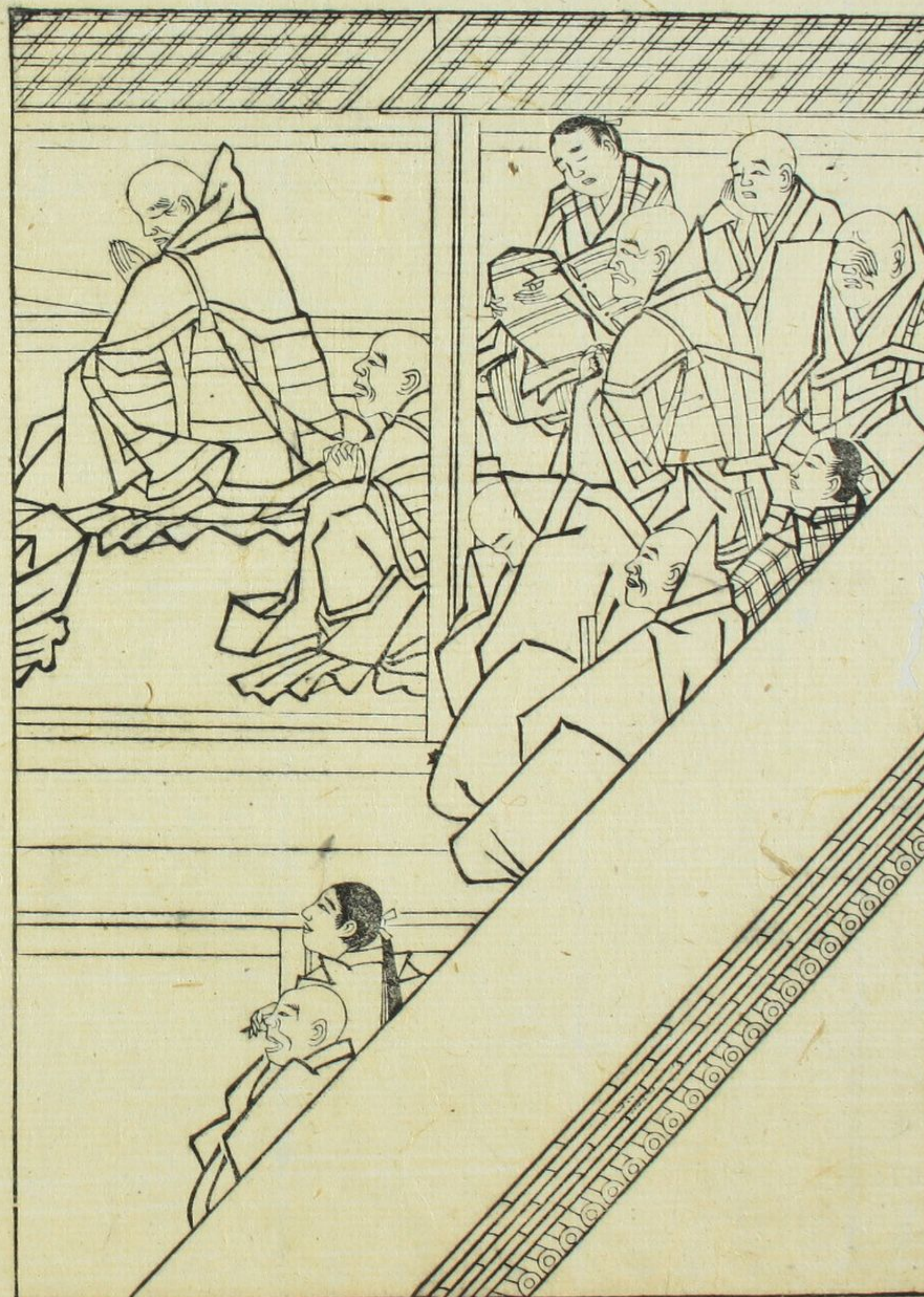
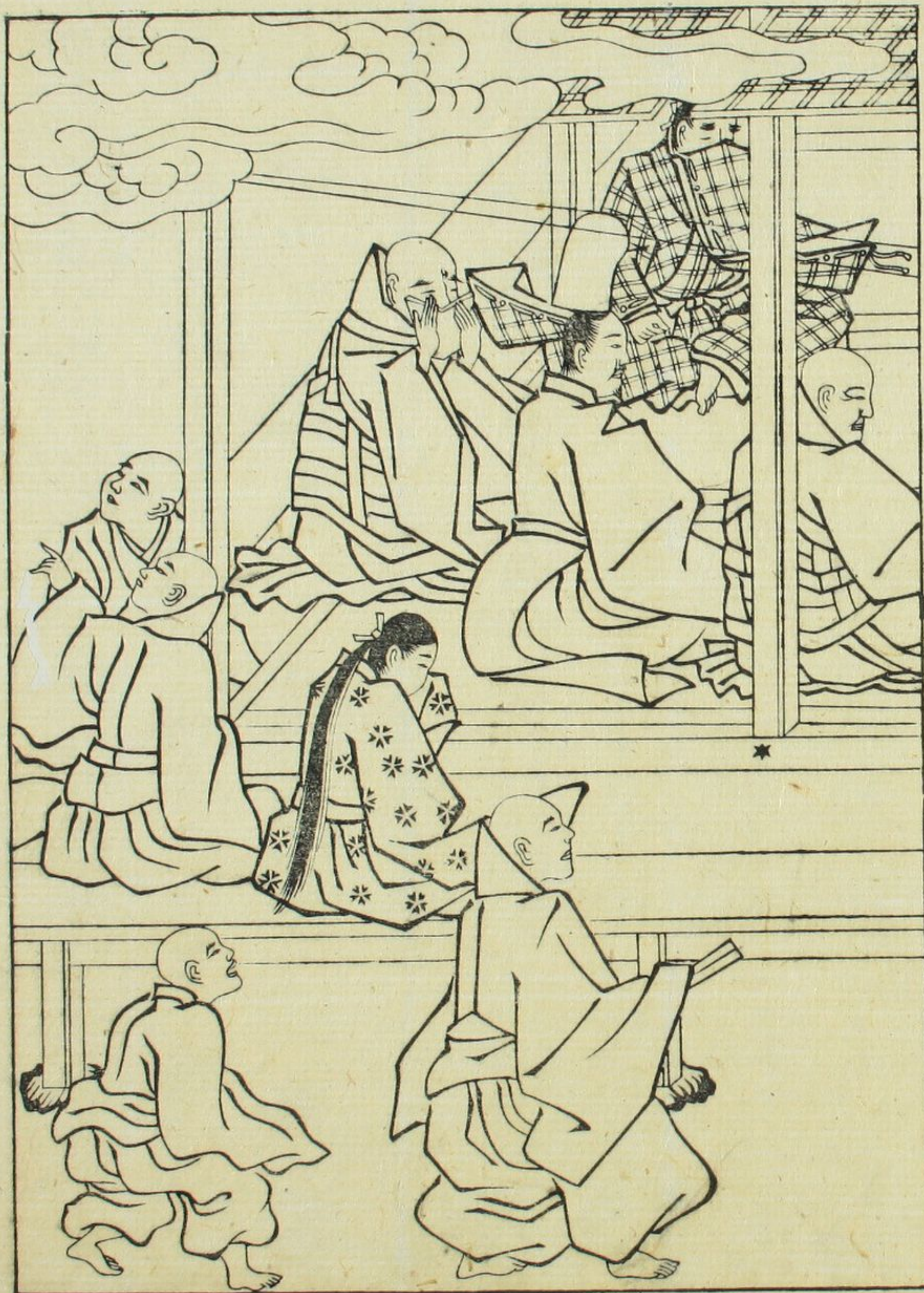
洛中洛外紫雲をえ。瑞相はまてて群集  
結縁の道俗すばまつ。法寺門の碩徳顯密の  
宗匠たりき。あつれも善をまててうつり  
やすく非をあつた免信はまてて。いり  
往生れ素懷をさるるまよき。末学偏執乃  
たひひりる古賢れあつたもららんや











梅尾の明慧上人高辨推邪輪三卷破記して  
選擇集を破と上人の門徒こりて難かん破くく  
しにらりてがらひて庄嚴記といへる一卷れ  
書をはらりてれ難かんを救くといへる義  
理不相應たうれあひる。此書破けりれのら。  
いよく名譽をおらされらる。入道民部卿  
長房卿いまごのり明慧上人よ歸したる  
人たのききこんのれ推邪輪を信して高野

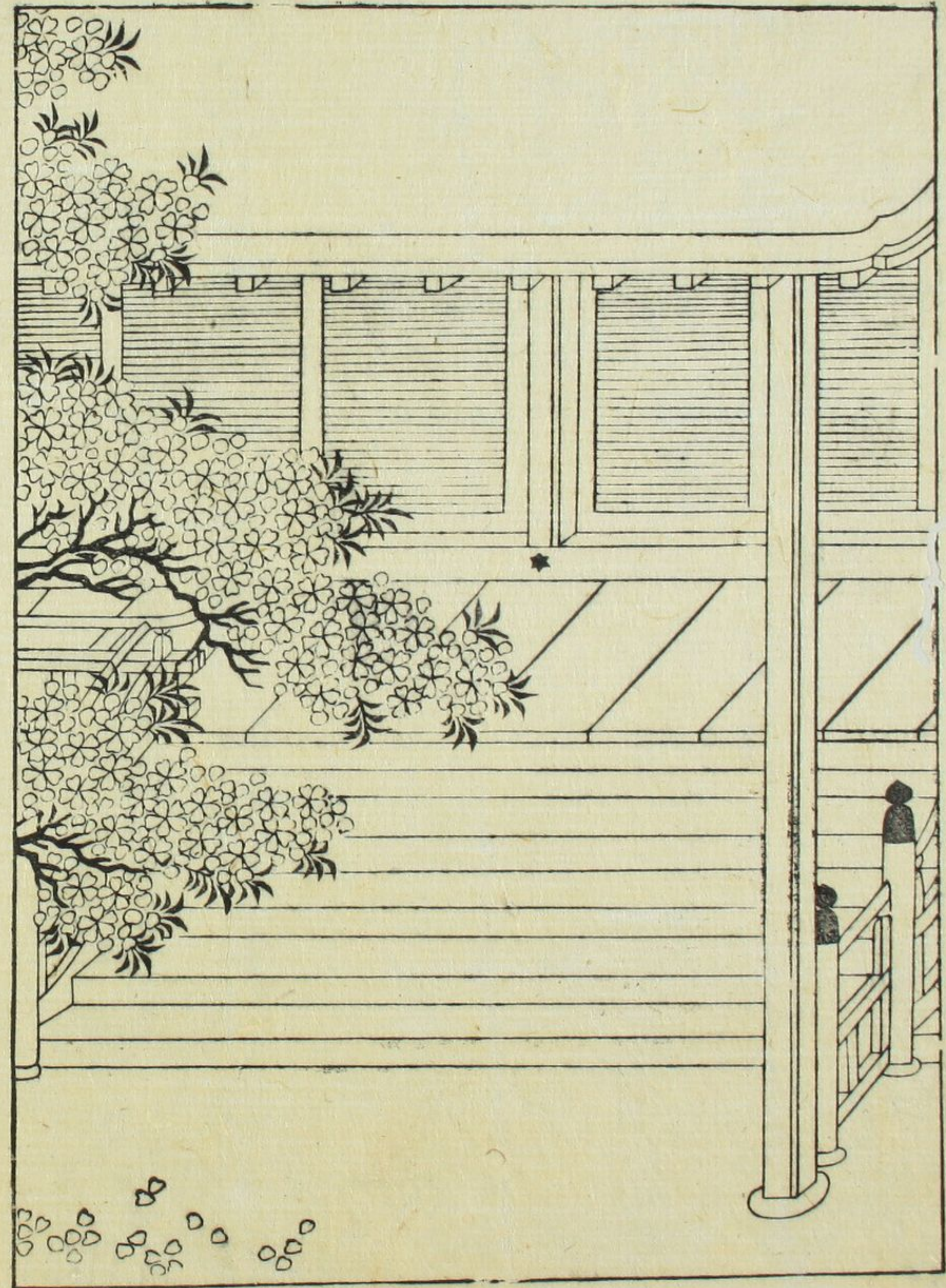
明遍僧都よ見せたてまらんごうの強を  
時僧都の文と尋し申はれるに選擇  
集破したる文のと申ささるれん我ハ  
念佛者の念佛を破してらん文をん手  
よこるべかの目よそらんべくの強を  
返し強よらるのの禪門をのらよハ選擇の  
いうま事を聞ひまるてらんの選擇に  
歸していつまの文の邪輪なりと申はれ

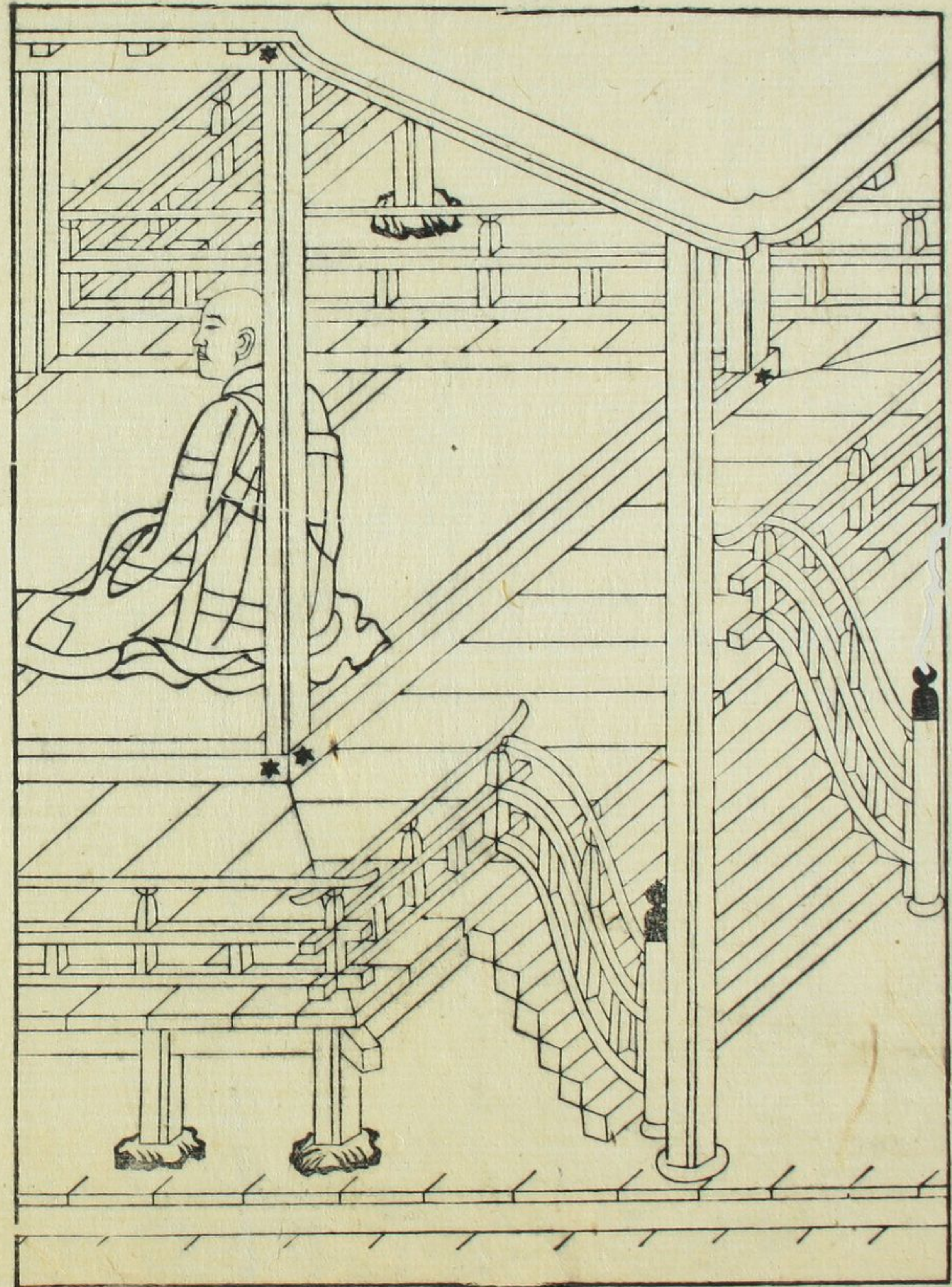
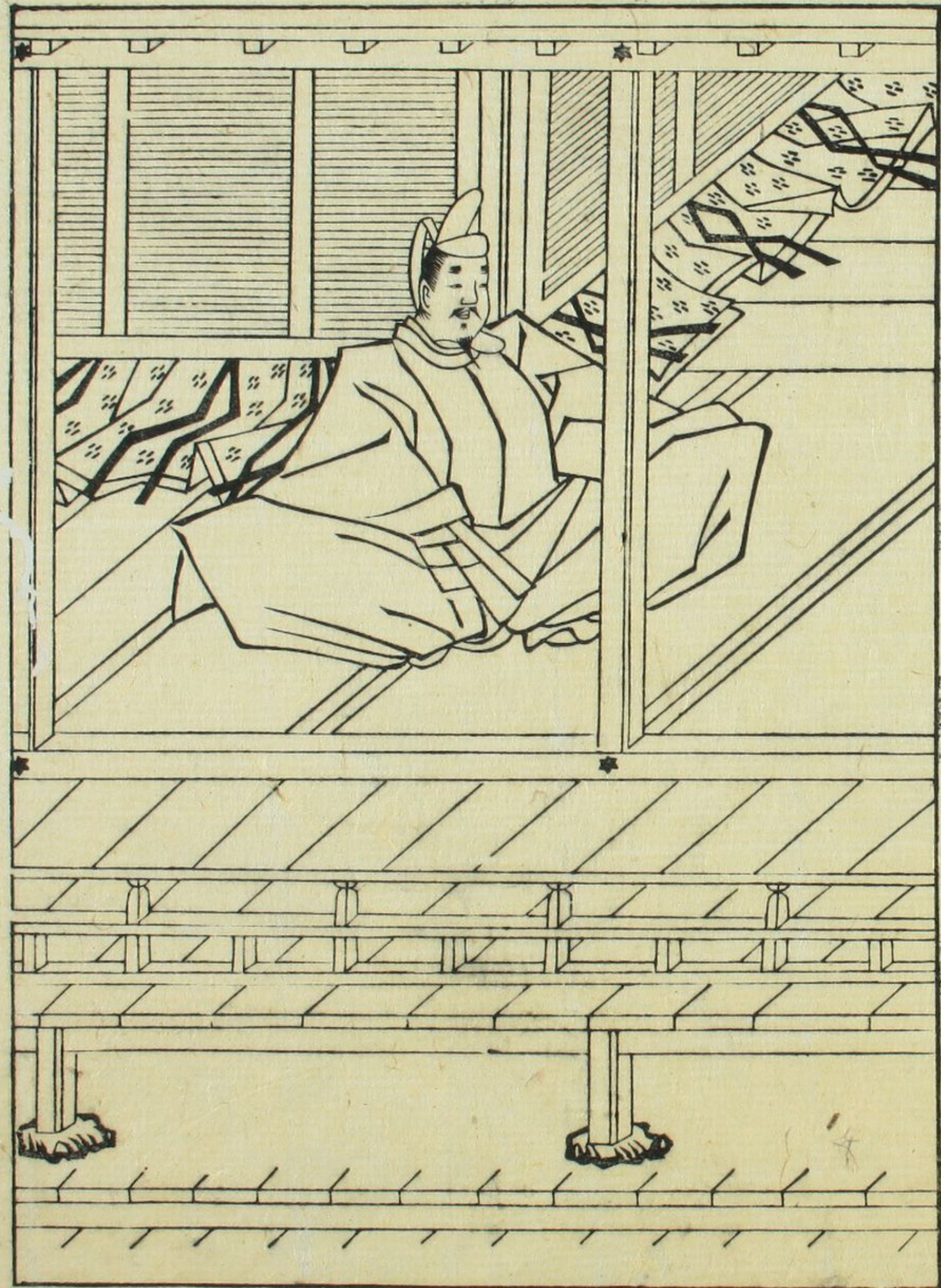
るることなりん。其後仁和寺に昇蓮房に推  
邦輪をもちて明遍僧都に見せしむるも、  
る。僧都申はれり。凡そ破のこらひ。先  
所破れ義を。よく心得て。破る家  
な。いたるに。選擇集の趣を。はやく  
心えし。して破り。れたるゆへ。それ破  
ら。に。あるら。は。れり。その中。異学異  
見を。もち。群賊。たる。ふる。を破り。れた

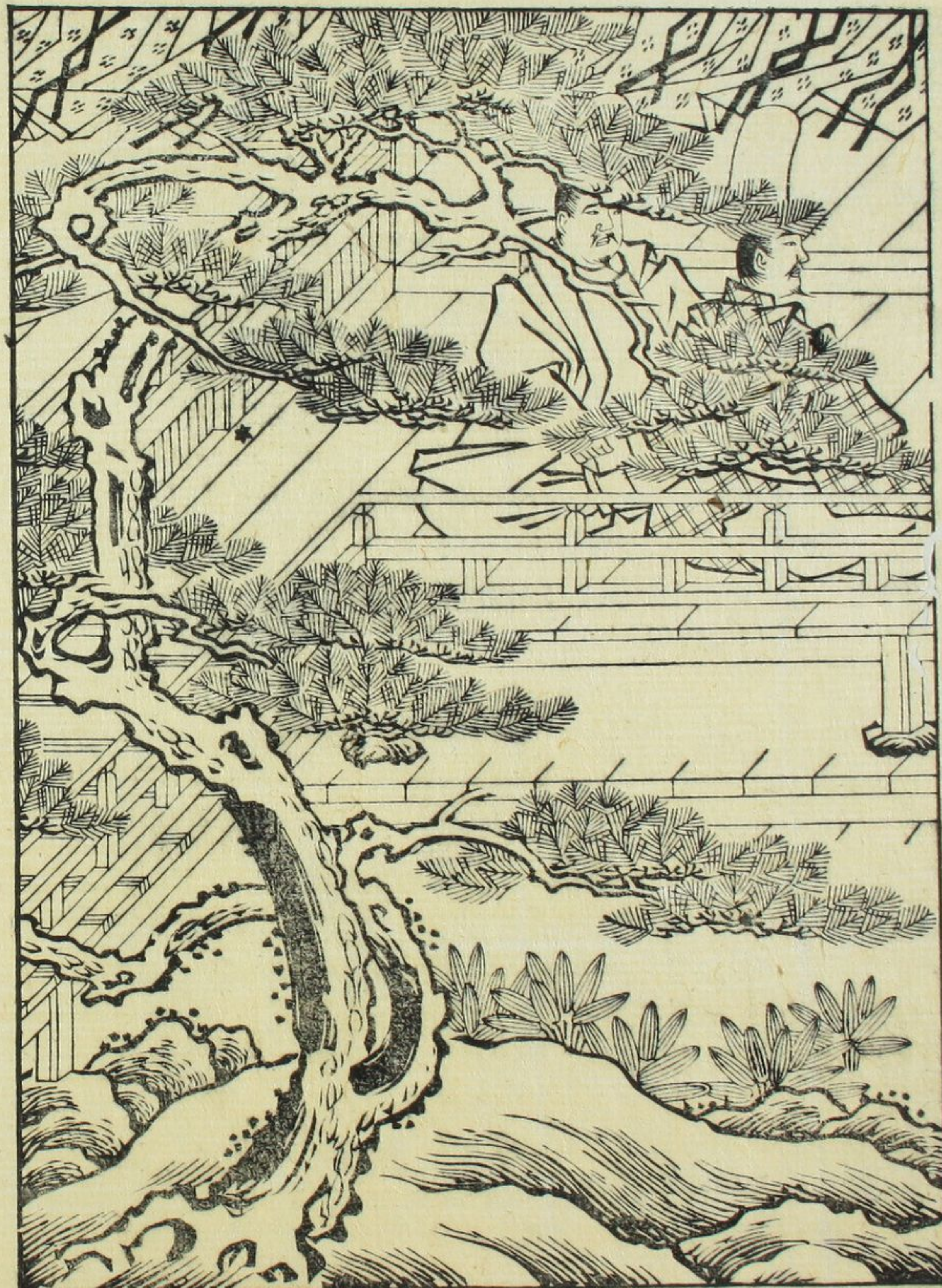
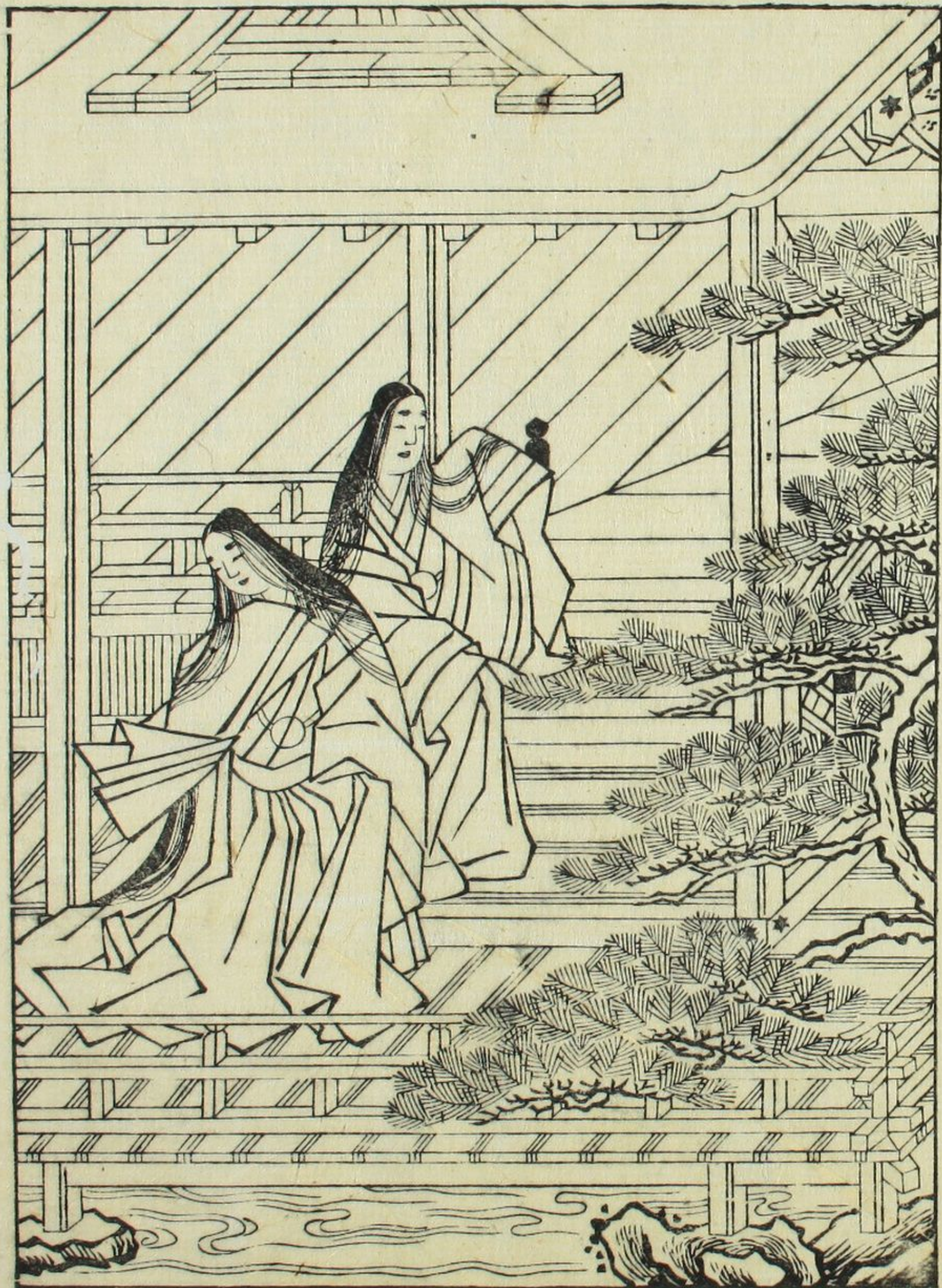
る。これ善導觀經の疏乃文なり。よく  
法然房に。あ。は。た。は。り。生死を。れ  
ま。ん。と思。ぬ。程。の。人。乃。これ。す。く。罵。詈。誹。謗。せ  
る。また。事。を。心得。し。と。れ。給。へ。り。此。僧  
都。論。義。交。擇。の。こ。ら。ひ。日本。弟。一。乃。ほ。ち。此。あ  
り。ま。あ。り。と。此。貞。慶。已。講。解。脫。上。人。澄。憲。法。印。  
明。遍。僧。都。會。合。し。て。り。此。一。族。三。人。い。さ  
宗。論。し。侍。ら。ん。と。申。さ。れ。り。澄。憲。法。印。筆。を

とらりて。三論は明遍あり。敵のつるさまをとりて  
敵を害と法相より貞慶あり寸紙をへん  
寸紙のゆゑ宗論はつるにのたまふべし流とを  
かききたらざる。すべて一期の間論義より  
はまら流とを申はるる侍。その評判無下  
よは侍とてか。はれん。は明慧上人管宰相  
為長御れをとりたり。たわなるに推邪輪の  
事を申い。たわあるは。はる事侍。う

こそひび事わたることれをひあつて。いま  
後悔し侍なりと申はれたることわ









禪林寺に大納言僧都静遍しやうへん。池の大納言  
頼盛よりもり卿の息きよく。弘法大師こうぼうだいしの門人かどなり。ゆづりめハ  
醍醐たいごの座主ざしゆ。勝憲かつけん僧正そうじやうを師しとして小野おのに  
流りゆうをうけのらにハ仁和寺にんごうじの上乗院じやうじやういん乃すなは法印ぽういん  
仁隆にりゆうよあひして廣澤ひろさわに流りゆうをつつして事相じじやう  
教相きやうじやう。援群えんぐんのほまじありき。浄土門じやうどよいさる  
濫觴らんしやうをこひかゝりしり申まをす。此こゝをば世よこ  
ぞりて選擇集せんたくしゆに歸き。念佛門ねんぶつもんにいるもの

にほくきこえし程ほど。嫉妬しやくどに心をねうして  
選擇集せんたくしゆを破やぶ。念佛往生ねんぶつじやうじやうの道みちをふさぐんと  
思おもひて破文やぶぶんく魚うまを料紙りやうしまてらるのへて選  
擇集せんたくしゆをひくきえるところあり。目め了りやうの所ところ按あん  
おほきに相違さういと。末代まくだい悪世あくせいに九く丈ぢやう乃すなは出離しゅつり  
生死しんじのころハいらいよ稱名しやうめいの行ぎやうよありきと  
見みらぶ。めりけはかゝりてこれ書かきを賞翫しやうくわん  
して自行じきやうの指南しゆんぱんよそやふるよをぞ申

と社なる。日來嫉妬此心を生じ、強々事成  
くひり、大谷乃墳墓よちうぐてく。  
たしく悔謝して、いらく今日より、上人を  
師とて念佛を行とて、一。聖靈照覽、  
たきて、先非、強々強く、くさす申  
は社なる。其後綱班を辭し、さくころ心圓  
房と号して、一向念佛して、社さ。あまは、  
續選擇をつらりて、上人の義道を助成し、一。

偈をびとんて、いらく一期、  
理唯稱阿弥陀。語嘿常持念と。又法照禪師の  
五會法事讚の。彼佛因中立。弘誓聞名念我  
惣來迎といへる。七言八句、此文を誦して。  
浄土宗、此肝心。この文、なりとて、はひよ、い申  
は、ま、なる。は、あ、よ、負、應、三年四月廿日。本意乃  
こ、く、往生、候、と、げ、ら、社、よ、ら、月、氏、よ、い、天、親  
菩薩、く、め、に、小、乘、を、信、して、五百部、此、論、を

はらわて大乘を破りかゝも。後、改悔の  
心をたて、大乘に歸り、大乘五百部の  
論議はらわて、はらわておまをばめき、震旦、  
宋の張羨相、いさゝ秀才、たわし時、ふく  
佛法をそ祿して、破法論をばくんと沈吟  
せしとら。何氏方便をめぐく、邪見の説  
ども、破りて見て、破るとす、好むやして。  
維摩經三卷をあへ、は、此經を披閱

して、ふく改悔の心をたて、護法論をば  
らわて、かへりて、佛教はたをけき、震旦、日域  
こゝたも、捨邪歸正、あやむ、じく、ま  
ふそ、侍、た、れ

